

三富新田と武蔵野の開発

国木田之彦

テーマ：江戸時代の新田開発の様子が今に残る三富（サントメ）新田の見学

実施日：平成 22 年 3 月 27 日（土） 参加者：10 名

10：00 東武東上線みずほ台駅に集合。タクシーで歴史民俗資料館に向かう。

三富新田の開発の様子が展示解説されているのを見学する。三芳の歴史、雑木林、柳沢吉保の書籍も刊行されている。

江戸時代中期、茅、ススキの草原だった武蔵野台地の、川越市、所沢市、三芳町にまたがる地域を新田開発。「富め」と直截な表現で三富（サントメ）と名付けられた。

12：15 バスで三富新田着。細長く仕立てられている屋敷地、畑をとおり平地林に入る。

下草、幼樹が刈り取られよく手入れされている。コナラのドングリが芽吹いている。コナラ、クヌギ、エゴ、サクラがみられる。ここで昼食とする。

六間道とよばれるケヤキ並木の道を歩く。樹齢 300 年のケヤキが続きさすがに立派である。

14：10 旧島田家住宅見学。江戸時代末期、寺子屋を開いていた典型的な田舎家。

さつまいも、狭山茶をあつかっている「江戸屋弘東園」に寄る。女将さんと話がはずみ、サツマイモの伏せこみを見せてもらう。この家は新田開発以来 14 代目ということである。落ち葉の堆肥を 50cm の厚さに積み稲わらで囲み苗床をつくる。そこにサツマイモを並べる。堆肥の発酵熱で発芽がはやまるのだ。「富の紅赤」（金時）という品種である。

15：45 多福寺を見学。広い境内、りっぱなお寺である。新田開発にかける意気込みが感じられる。

16：22 バスで鶴瀬駅に出る。駅前で反省会。

天気にも恵まれ春の気持ちよい武蔵野散策でした。

三富新田を調べていて興味深く感じたことがあります。

1) 川越は江戸北側の守りとして重視され有力大名が配されてきた。春日局ゆかりの喜田院。ここが名刹として知られるようになったのには「天海」という妖僧の存在があった。家康、秀忠、家光の三代に信任され宗教面の指南役を務めた。家康の日光改葬を主導したり、「家光誕生の間」を喜田院に移築したり、大きな政治力を持っていた。おかげで新河岸川が開削され川越が舟運の中心地として栄えるきっかけとなった。

2) 三富新田の地割りは北宋の開発法に依っており、幅六間の道路を中心に間口 40 間、奥行 375 間の短冊状に区画し一戸当たり 5 町歩ずつ配分した。この方法は先行して開発された西荻窪村や吉祥寺村でも採用されており、現在の地図から短冊状の道路がみてとれる。

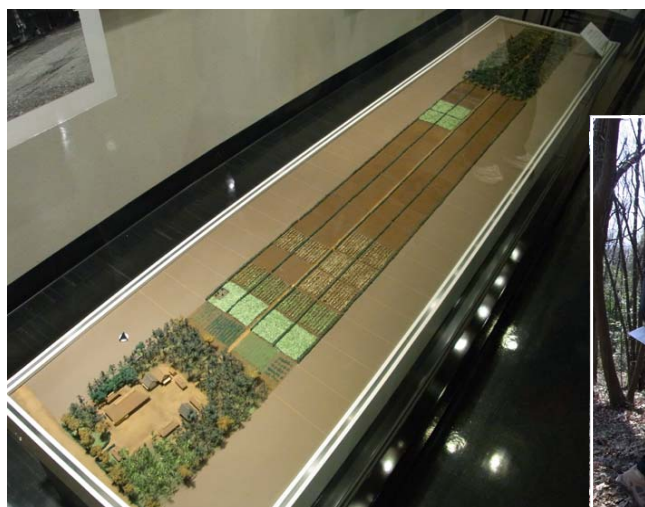
屋敷地：畑：平地林＝1：5：3 の割合になっている。落ち葉、下草、幼樹、下枝は畑に鋤き込んだり、かまどで燃やした。落葉広葉樹は薪、炭に加工し換金商品となった。

このような武蔵野の雑木林が仕立てられたのは江戸時代中期以降と考えられます。それまで

は茅、ススキの大草原であったことが知られており近隣の農民が草山として刈敷、飼料、燃料に利用してきたのです。関東地方の極相林は常緑広葉樹であると言われています。そうすると草山を維持するため毎年火入れをおこない、手を加えてきたのです。いつの時代から草原となり草山として利用されてきたのか、まだまだ調べるべき疑問点がでてきます。

3) さつまいもは川越の特産品です。本来の気候では種イモが発芽するのは5月になります。収穫期が遅れ寒い時季と重なり収量が落ちてしまいます。そこで3月に発芽させる伏せこみという育苗法が開発されたのです。江戸時代後期、さつまいもは大量に生産されるようになり、江戸庶民の常食ともなっていました。青物市場とは別の流通ルートができ取引されました。

4) 航空写真や地図を見ると解説どおりの地割りがはっきり見て取れますが、現地を歩いてみると印象がかなり違ってきます。畑はともかく、平地林のあちこちが転用され工場や倉庫が建っているのです。屋敷地も農家本来のたたずまいは少なく、倉庫、営業所が目立ちます。畑にいたご婦人に聞いてみると、持っているのは作業中の畑ともう一か所は向こうの工場に貸しているとのこと。農地の所有者も見た目以上に複雑化しているようだ。これらすべての事象は相続に起因していると考えられる。一戸当たり5町歩の所有地、1万5千坪である。標準家族の相続税を試算したモデルによると1億5千万円という金額が示されていた。土地を売却しないかぎり、この金額は捻出できないだろう。



左写真：歴史民俗資料館 地割りの模型



上写真：平地林の中を歩く



左写真：ちょうど作業中だった、さつまいもの伏せこみを見せていただく